



事業部
佐藤 秀 さん
Sato Shu

【持っている資格】
少林寺流錬心館空手道3段
【得意な分野】
農業・農村開発
【得意な言語】
スワヒリ語

Q 学生のときにやっておくべきことは？

A 勉強に費やした時間が、後に生きる

食料問題に関心を持ちながらも、中学・高校では難民や紛争問題なども学び、部活では空手に夢中になりました。また、大学ではとにかく勉強に時間を費やしました。卒業に必要な単位を取得した後も、興味ある授業をたくさん履修し勉強しました。それが、途上国の現場で仕事をする「今」に生きています。



住民の人々とは時間をかけていねいに対話する

Q この業界の魅力は？

A 一緒に汗を流して感じる「成長」

「人々が変わっていく姿」を間近に見て、感じられるところ。はじめは、「モノもカネもない。われわれは何もできない」という雰囲気だった現地の方々でも問題意識を共有しながら、一緒に汗を流して活動し、成果が見えてくると、彼ら自身が生き生きとしてくる。その過程や成長に関われることです。

Q この業界を選んだきっかけは？

A 子どもが餓死する現実を前にして

小学校低学年の頃、飢餓の問題に取り組むNGOの方のお話を伺いました。その方が「3秒に1回」手をたたいて、「世界では3秒間に一人の子どもが餓えて死んでいる」と話しました。幼心に衝撃を受け、アフリカの農業開発を目指す原点になりました。「ばん」という手をたたく音は耳を離れません。

Q この会社の魅力は？

A 現地の人々に真摯に向き合う姿勢

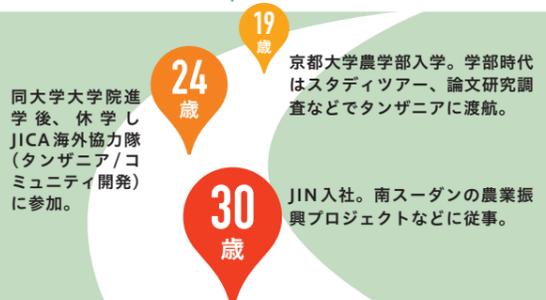
さまざまな問題を抱えた途上国の人々に真摯に向き合い、その暮らしが少しでも良くなるよう働く、という姿勢を社員のみなさんが持っており、共有するのが魅力です。私はタンザニアで経験を積んできましたが、ウガンダや南スーダンなど、一つの国にこだわる方も多く、それが強みにもなっています。

Q 仕事の内容は？

A 南スーダンの農業振興を担当

入社以来、主にアフリカの農業・農村開発にかかる調査や情報収集、プロジェクトの管理運営などの業務調整を行ってきました。現在は、南スーダンの農業振興プロジェクトに従事し、養鶏事業の活動計画の策定、先方政府機関との協議・合意形成の促進業務なども担当しています。

Career Path キャリアパス



現地の住民と共に種まきに汗を流す（「南スーダン国食料安全保障・生計向上のための農業振興・再活性化プロジェクト」で）

途上国への敬意を忘れず、とことん向き合っていく

住民の暮らしに寄り添う
答えは現場にある。JINの社員一人ひとりに浸透しているこの言葉こそ、同社が培ってきた経験の象徴だといえる。
たとえば、同社が長年取り組んでいるプロジェクトの分野である「栄養改善」の活動では、学問的なアプローチをしたり、成功事例を当てはめたりするのはなく、現地の村を訪問し、住民の生活に寄り添うことからスタートした。それは形式的な調査でもないし、提案ありきでもない。まずは、謙虚な姿勢で住民の話聞き、時間をかけて、近い距離で話ができるような環境と関係を築いていく。同時に、人々の暮らしを肌で感じながら、文化や習慣、その背景にある考え方を学んでいく。
それを繰り返していくことで、住民が実際に入手できる食材や、料理にかけられる時間やお金のことはもとより、一般的な家庭がもっている鍋の数、調理器具や釜土（火力）の状態、栄養に対する本音や生活の中での優先順位など、机上で考えるだけでは決して分からなかったリアルな暮らしが見えてくる。それこそが、課題に対する「生きた」提案、つまり「答え」につながるのだ。
途上国の人々こそが原点
「どの分野の活動でも、現地の人々こそが出発点であり、原点なんです」

と代表取締役の大野康雄氏は語ってくれた。「私たちが目指すコンサルタントとは、一方的に何かを教えるのではなく、相手の視点で物事を見ながら、住民と同じ歩幅で歩み、一緒に考えることができる人である」。そのためには、途上国の人々やその営みに対して、敬意をもつことを忘れてはならないのだ、と大野代表は強調する。
もちろん、どのプロジェクトでも実施期間を厳守しなければならないし、予算の制限もある。現場を最優先にすることは、口で言うほど簡単なことではない。しかし、同社では、本当に必要なと判断すれば、会社が「持ち出し」で予算を確保し、時間をかけて活動することができるよう調整ができる。よい仕事をするために「現地の人々ととことん向き合う」ことを前提にしている社風は特筆すべきである。
真摯に努力できる人材と共に
同社は若手スタッフの育成にも力を入れている。採用活動においても応募者の経歴以上に、その人がもつ根本的な価値観を重視している。「途上国の人々のために何をやりたいのか。その上で、今の自分には何ができて、何が足りないのか」ということを真摯に考えて努力できる人、さらに、国際協力全体の質を高めようとする気概をもった人材のチャレンジを求めている。